

アミーゴ会だより

2025年4月
通巻第62号
季刊 2025-II

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：吉野 隆

メキシコと日本をつなぐ

生誕130年記念「北川民次展 メキシコから日本へ」に寄せて
～メキシコ壁画運動とマエストロ・キタガワ～
“インディヘナへのまなざし”を読む

神田外語大学 名誉教授・理事
メキシコ・日本アミーゴ会 幹事
柳沼孝一郎

はじめに

メキシコ市の中心部、ソカロの名でも親しまれる憲法広場に立つ。その昔、守護神ウィツィロポチトリと雨の神トラロクを祀ったテンプロマヨールが聳え立つアステカ王国の都テノチティトランの聖域だったところだ。左手には、スペインそしてローマに渡る道中に訪れた支倉常長慶長遣欧使節も仰ぎ見たであろうアメリカ大陸最大規模のメトロポリタナ大聖堂が建ち、正面には壮麗な国立宮殿が見える。スペインからの独立を呼びかけたイダルゴ神父が打ち鳴らした



国立宮殿と憲法広場

教会の鐘が吊るされた宮殿正門を入ると、宮殿内の中央階段の壁一面を飾る、巨匠ディエゴ・リベラの大壁画「メキシコの歴史」が迫ってくる。そこに描かれるのはメキシコの先史時代から、アステカの民の暮らし、スペインの征服者コルテス軍とアステカ軍の戦い、スペイン植民地時代の社会、トマス・モアのユートピア建設を实践したバスコ・デ・キログ神父、独立の父イダルゴ神父とその後継者モレロス神父、独立後に「レフォルマ（改革）」を断行しメキシコ近代化の父として広く敬愛される先住民インディヘナ出身のベニト・フアレス大統領、マデロやパンチョ・ビジャ、エミリアーノ・サパタなどメキシコ革命の英雄たち。それは近代から現代までのメキシコの悠久の歴史を壮大なスケールで描いた大壁画だ。近くのアラメダ公園の一角、ディエゴ・リベラ壁画博物館にある、骸骨の貴婦人ラ・カトリーナを中心に描いた「アラメダ公園の日曜の午後の夢」と並んでメキシコの至宝である。



メトロポリタン大聖堂



ディエゴ・リベラ画 「メキシコの歴史」 (一部)

＝ 目 次 ＝

- | | | |
|---|------------|------------------|
| 1.メキシコと日本をつなぐ：「北川民次：インディヘナへのまなざしを読む」 | 神田外語大学名誉教授 | 柳沼孝一郎...1 |
| 2.メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ一人旅 14 -プエブラ(村)という大都市」 | 会員 | 阿部修二 ...5 |
| 3.アミーゴ会の活動：「日墨友好 415 周年：海軍帆船クアウテモック号通訳ボラティア記」 | 会員 | 柳沼孝一郎...8 |
| 4.アミーゴ会の活動：「(告知) 2025 年度 総会・懇親会のご案内 (5月24日11時)」 | | ...7 / あとがき ...8 |



ディエゴ・リベラ画「アラメダ公園の日曜の午後の夢」

壁画運動：メキシコ革命と美術

そこからほど近い公教育省 (SEP) の庁舎内には、リベラ作「革命のバラード」をはじめメキシコ革命を伝える壁画や、ダビッド=アルファロ・シケイロスの作品が各階を飾る。その隣、サン・イルデフォンソ学院の建物にも、リベラ作「創造」やホセ・クレメンテ・オロスコ作「コルテスとマリンチェ」といった大作が壁面を飾る。メキシコが世界に誇る「壁画運動」の躍動を今に伝える傑作の数々だ。

民主的政治体制と農地改革を唱え、1910年11月20日に勃発したメキシコ革命は、1917年に革命憲法が制定されて一応の終結をみた。そうしたなかで、著書『宇宙的人種』でも知られる公教育大臣ホセ・バスコンセロスは、革命の意義と思想とインディヘナやメスティソ (混血) の伝統文化の神髄を壁に描き、民衆に伝えようと考え、「壁画運動」(ムラリスモ) を呼びかけた。

まさに民次の言う「メキシコに民族革命が成功し、国をあげて民族の誇りを発揚しよう」という時、まさきに取り上げられたのが美術であった。祖先アステカ人は偉大な芸術作品を後世に残した」からであり、「政府も、美術こそ革命の貴い武器であることを知った」からであった。

壁画運動は国民統合のための民族主義的運動を推進する原動力ともなったが、その一翼を担ったのがリベラ、オロスコ、シケイロスであり、マエストロ・キタガワと呼ばれた北川民次であった。

メキシコとグアダハラハの美の鼓動

メキシコ市を南北に貫くインスルヘンテス大通りの、ワールドトレードセンターの近くにポリフォルム・シケイロス文化センターがある。建物外壁には台形状の壁画が途切れることなく、館内の壁面全体には連続して描かれた、地球から宇宙に向かう人間



シケイロスとオロスコ



シケイロス画「人類の行進」

の生の旅を表現した壮大な「人類の行進」には息を呑む。

さらに南に進むと前方に UNAM (メキシコ国立自治大学) の総長タワーが見えてくる。学生総数 37 万人を擁するラテンアメリカ最大規模の総合大学だ。ユネスコの世界遺産にも登録されている大学構内に配置されたシケイロ



UNAM 総長タワー

スの立体壁画、そして大学中央図書館の全壁面を覆うオ



シケイロス作「立体壁画」



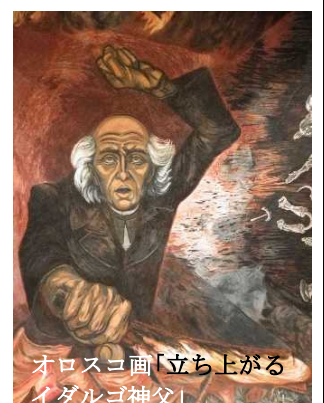
オゴルマン作中央図書館壁画

ゴルマン作の壮大なモザイク壁画も一見に値する。

そこからほど近い、閑静なココアカン地区にフリーダ・カーロの生家「青い家」がある。壁画運動を牽引する新進気鋭の画家リベラとの邂逅、結婚そして生涯を通して「革命と芸術」に生きた「炎のメヒカーナ」フリーダは、死の 8 日前、真っ赤な切り口を見せて並ぶスイカの画に黒の絵具で VIVA LA VIDA (ビバ・ラ・ビダ: 人生万歳) と記した。それは、壮絶な肉体の苦痛と心の渇きのうちに 47 年を生きて得た、人生の応えであったのかも知れない。

また、スペイン植民地時代の面影を今に残す、「バラの都」としても知られるメキシコ第二の都市グアダハラ市の歴史地区を歩く。

ユネスコ世界遺産にも登録された、かつての孤児院「オスピシオ・カバーニャス」内に描かれた、同市出身の大画家オロスコの「スペインのメキシコ侵略」や



オロスコ画「立ち上がるイダルゴ神父」

「炎の人間」と題した 50 以上の壁画と天井画は観る者を圧倒する。大聖堂の隣りにあるハリスコ州庁舎の中央階段、見上げればかりの天井一面を埋める、メキシコ独立運動の指導者ミゲル・イダルゴ神父の雄々しい姿を描いたオロスコの作品「立ち上がるイダルゴ神父」は圧巻の一言につきる。すべてが、「メキシコ美の鼓動」だ。

インディヘナの残した美術

メキシコの造形美術の源泉は古代メキシコいわゆるメソアメリカの芸術に求められる。民次の言うように「インディヘナの残した神々の偶像に彫られたリズムや、フォルムや、マッス（原文ママ）の力は、現代の芸術家の誰が表現し得るであろうか。実に立派な美術作品である。巨大な石に刻まれた民族の精神である」からだ。

レフォルマ大通りの先、鬱蒼と生い茂るチャプルテペック公園の一角に国立人類学博物館がある。雨の神「トラロク」の巨大な石像が迎えてくれる。博物館ロビーを飾る壁画「昼と夜」には鬼気迫るものがある。



雨の神「トラロク」



タマヨ作「昼と夜」

オアハカのサポテカ族出身の「メキシコの魂を謳う」画家でも知られるルフィーノ・タマヨの傑作だ。館内の、メソアメリカの母なる文化であるオルメカ文明の「ラ・ベンタの巨石人頭像」、ユカタン半島の密林に栄えたポナンパックの色彩やかなフレスコ画、マヤを代表するパレンケ遺跡の「碑銘の神殿」から発掘された「翡翠の仮面」、トラロクの妻にして水の女神「チャルチウィトリクエ」の石像などいずれも芸術性の高さを物語るメソアメリカ文明の息吹だ。



チャルチウィトリクエ

とりわけアステカの造形美術はメソアメリカの世界観や宗教観そして神話に深く関わっている。

なかでも、大地の老女神にして、部族神ウィツィロポチトリの母でかつ神々と人間の母とされる、重さ 24 トン、高さが 3.5m の「コアトリクエ」の怪異な巨大石彫はおどろおどろしい。頭は身体から切り離され、首から生えている、



コアトリクエ

向かい合う二匹の蛇の頭が顔となっている。首飾りは人間の心臓と手で作られており、髑髏の垂れ飾りがついている。「蛇のスカート履く女神」を意味する通り、絡み合った蛇のスカートを履き、人間の死体を生の糧とするため手足には奇怪なかぎ爪がついている。人間の誕生と死を象徴するといわれる恐怖の神の権化だ。

民次、児童の美術教育に渾身

ニューヨークで美術とフロイト心理学を学んだ民次は、「1923 年 9 月、蘭の花の香り高いメキシコ中部の町オリサバ」にたどり着く。

1920 年にオブレゴン将軍が大統領に就き、革命動乱も終わり、建設期に入ったころであった。折しも、壁画運動つまり「メキシコ・ルネサンスの旋風がまき起こり、リベラもオロスコもシケイロスも祖国メキシコに帰ってその歴史的な壁画の仕事を始め、文部省も出来得る限り、美術家に保護を与えようとした」ときであった。

民次は聖画を行商しながら糊口を凌ぎ、「この絶好のチャンスにメキシコ国立美術学校（名門、サン・カルロス美術学校）に入学し、三ヶ月後にはそこを優等生で卒業」、公教育省がチュルブスコ修道院に設置した「野外美術学校（Escuela de pintura al aire libre）に参加する資格」を得た。修道院での生活は一年あまりつづいたが、美術学校には「後にリベラの妻君となったフリーダ・カーロ」も入学、児童美術教育は軌道にのった。

民次がメキシコへ来たのは、「先住民インディヘナとその生活に引かれた」からであり、「彼等の社会的条件や、習性や、心理を研究しよう」と志したからであった。だからこそ、教員仲間で「折ある毎にインディオの教育を話しあって来た」のであった。「彼等の前史時代からの精神的遺産、彼等の生活のプリミティビズム、心の働きの単純さ、負わせられて来た重荷等が、どんなに美術教育の効果をあげるよきチャンスとなり得るか」という民次の訴えは同僚の支持を受けた。

10 年に及ぶメキシコ革命の戦闘で人口の 1 割に当たる 150 万人が死亡し、800 もの村が地図から消え去り、100 万人近くの非戦闘員が飢餓や病気のために命を落とすという動乱のなかで、「われ等の革命は遊惰な児童や農民に、喜びと慰安を与えてやらねばならぬ。内戦ですっかり乱れた人心と家庭とに、芸術の美德で落ちつきと平和を与えねばならぬ」からであり、「俺ほど美術教育に関心を持ち、希望を抱いている者はない」からであった。

トラルパン野外美術学校で教える

リベラ、オロスコ、シケイロスらの壁画運動に参加した民次は 1925 年、メキシコ市の郊外にあるトラルパン野外美術学校（Escuela de pintura al aire libre de Tlalpan）で教え始める。アステカの言語ナワトル語で「岩石の上」を意味する部落で、こじんまりとした、美しくて住みよいところであった。

マエストロ・キタガワは「人間が美の感情を失って

生きることは不幸だ」と考え、「個人の精神が甚だしく歪められてしまっている。この歪みを直すには、美術教育が一番いい。私は美術教育をやろう」との思いを深めた。インディヘナの人々は「従順で、無抵抗で、その眼は小児のように澄み、よく笑い、よく楽しみ、平和を維持することに最善の努力を払う人々」であるからであり、抗い難い厳しい現実のなかで生きながらも、「自由を願望し追及する人々」と共にありたいと切望するからであった。

タスコ野外美術学校の開校と校長就任

そうしたときに、学校をトラルパンからタスコへ移す話が持ち上がり、マエストロ・キタガワが校長として赴任することになった。タスコはスペイン植民地時代に銀山として栄え、チュリゲラ様式を駆使した豪華絢爛なサンタ・プリスカ教会が聳えるこの上もなく美しい町だ。



タスコ全景



サンタ・プリスカ教会

やがて妻のてつ乃と娘も到着、タスコ野外美術学校の校長として児童美術教育の実践が始まった。生徒 60 人、「無智で、純朴で、平和」な児童たちに「実生活の画を描かせる」。マエストロはやがて気づかされた—「児童たちは、この世からもっと大きな自由を

得ようとして戦っている絵を描きます。そこには緊張があり、真剣さがあり、どこまでも現実に食い下がる迫力を示します。彼等の絵は、いつでもその戦いの中から生まれて来るのです」。

いつしかタスコ野外美術学校を訪れる人も増え、「一日に二三十人に及ぶ」日もあった。私邸「カサ・キタガワ」には、藤田嗣治やヤスオ・クニヨシ（国吉康雄）やイサム・ノグチが投宿し、リベラもシケイロスも幾度ともなく訪れ、美術談議に花を咲かせたという。こうしてマエストロ・キタガワは、「ルフィーノ・タマヨやアルフレド・サルセのように、メキシコ美術を世界的水準に上げた偉大な友人も現れた。そして私は、大した変化もなく、ただ一介の美術教師として生き残ることができた」のであった。

壁画運動が展開されるなかで児童美術教育に心血を注ぎながら、1920年代から30年代の激動のメキシコ社会を生き抜き、日墨文化交流の礎を築いたマエストロ・キタガワには1986年にメキシコ政府から最高位の「アギラ・アステカ勲章」が授与された。

会員の皆さんには今も販売されている、北川民次著『絵を描く子供たち—メキシコの思い出—』（岩波新書、昭和27年）の一読をお薦めしたい。（了）

【編集部注：「生誕130年記念 北川民次展—メキシコから日本へ」は、アミーゴ会メルマガでもご案内しましたように、名古屋市美術館（会期：2024年6月29日～9月8日）を皮切りに、世田谷美術館（9月21日～11月17日）、郡山市立美術館（2025年1月25日～3月23日）で順次開催されました。各館パンフなどを下掲します。なお、本稿掲載写真は筆者の撮影です。また、本文中の引用語句は『絵を描く子供たち』からです。】

ぶらりメキシコ人旅 —プエブラ(ロ)＝村という大都市— (Puebla)

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
写真家・ルポライター 阿部修二

はじめに

旅をしながら真から楽しめないのは、その土地の名物、美味しいものに出会ってもその挑戦を許さない問題の私の胃袋。旅の話を盛り上げるのにその楽しみの一つ、メキシコ料理を紹介できないのは、上記のような理由によるもので、そのことをまずは理解いただきたい。今回は土地の名物モーレ・ポブラーノで有名な大都市、プエブラ州の州都プエブラを紹介することにしよう。

メキシコの旅を始めた頃のこと、ガイドブックに沿ってその歴史地区を見て回った。その話は後に記すことにするが、この土地の名物はモーレ・ポブラーノ（カカオと香辛料で味付けした黒いソースで食べる鳥料理）だとガイドブックに載っていたので、それをトライしようとして中央広場（ソカロ）に面したメキシコ料理店に入ったのだった。大きな土鍋が竈の上にドッカーリと腰を据え、店先で香ばしい臭いを餌に客を待ち構えている。有名などころらしい。席はほぼ埋まっていて、1人客は迷惑かなと思いつつ小さなテーブルに落ち着いたのだった。

さっそく注文票を手にした恰幅の良いエプロン姿のセニョーラが現れ、何にしますか？と尋ねるので、私は当然のようにモーレ・ポブラーノと即答したのだった。その辺までは何とかスペイン語が理解できる状態の私には、次に彼女が発する言葉、何を尋ねているのかまったく理解できず困ってしまった。繰り返す彼女の声のボルテージがあがり、それが他の客にも聞こえるほどになり、ついには聞き分けの無い私に彼女は身振り手ぶりで伝えようとしたのだった。彼女はペンを持っている右手で自分の股と胸とを叩いて、どっちにするかを尋ねているのだとようやく納得。それまで料理などしたことのない私はモモ肉やムネ肉という部位があることを知らなかったのだから、大いに恥をかくことになったのだった。そうした寸劇を見せられた客の爆笑、そしてあのセニョーラの必至の映像は今でも鮮明に脳裏に刻まれている。セニョーラ、ゴメンナサイ！



モーレ・ポブラーノ 絶品の一皿

今でこそモモ肉とムネ肉の味と値段の違いが分かるようになったが、その当時の私は食に関して無頓着。当然ながら鶏肉の部位のスペイン語を知っているわけが無い。モモをムスコ、あるいはピエルナ、そしてムネ肉をペチューガと言うらしい。胸だからペチョとは決して言わないように！

フランシスコ修道院から始まった

人口 169 万人という大都市。市域が広がった今日のプエブラを紹介するには限界がある。と言うわけで、私が紹介するのは世界遺産になった歴史地区になる。メキシコを旅されたことのある方は多分よく知っていると思うが、貴重な写真もあるので読んでいただきたい。

前回紹介した Cholula 近郊に位置するプエブラは、1531 年にクエトラシュコアパン盆地のサンフランシスコ川東岸の土地に設置された。もちろんこの川の名が前記のようになったのはフランシスコ会の修道士トリビオ・パラディスがこの地に修道院を開設したためである。植民地時代初期の都市建設は、以前からあった先住民の町をヨーロッパ風に作り替える形で行われていたことは以前から述べてきたが、ここプエブラは無垢の土地（先住民の使用地であったことは想像できるが）に建設されたと言うことで、スペイン人植民地として出発している希な事例である。



サンフランシスコ修道院教会

アステカ帝国の被征服後、スペイン国王によってメキシコに入植が許されたフランシスコ会、アウグスティヌス会、ドミニコ会は托鉢派の修道会で、住民が集中している町に修道院を建設するのが常だった。その理由は住民の改宗の任務が課せられていたと同時に、住民からのお布施（冠婚葬祭のお礼）によって生活を維持する必要があったからだった。加えて、彼らは聖職者であると同時に政治と深く関わっていて、キリスト教を通してメキシコ先住民を統治する役割を担っていたのだ。

ではなぜ民家の無い、住民の住んでいない土地に町の核となる修道院を作ったのだろうか。

植民地時代初期、スペイン人はメキシコ市の中心部に居を構え住んでいたが、征服者(兵士)に加え、その家族が続々と渡墨してきてスペイン人が増えつつあった。そこで起きたのがパンに必要な小麦不足だった。首都のスペイン人は先住民のトーモロコシを原料とするパンであるトルティーヤになじめず、彼らの食欲を満たすために小麦生産の基地としてこの土地が選ばれたのだ。

この土地はメキシコ市と東岸の貿易港ベラクルスとの交易路の途中に位置していたことも、町の繁栄が約束されることになった。当初、スペインで家族持ちの農業移住者を募ってこの地に入植させ、一定期間そこで農業に従事すれば国王がその土地を譲渡するという植民地法を定めている。と言うのも、メキシコ市に住むスペイン人は官僚、小貴族や裕福な商人、そして兵士上がりのエンコメンデーロ(収税領主)で、富を得るために戦うことに長けていても土塊と戦うことを嫌っていた者たちだった。加えてトーモロコシの食文化を持つ先住民は小麦の生産に関して無知だったこともその理由だった。当然のこととして先の入植スペイン農民は、レパルティミエント(労働者分配制度)で近隣集落の先住民を期間労働者として低賃金で働かせていたことが知られている。

物流拠点プエブラ：モノづくりの街に

交易路の宿場町プエブラは物流と同時にヨーロッパ文化を吸収する素地を身につけていた。ヨーロッパからの物品はこの地を刺激し、首都メキシコで必要とする物品の製造技術を根付かせた。それまではるばるヨーロッパから航路で輸入する以外に入手不可能なものをこの地で造ることに情熱を燃やす職人が育っていったのは、物流拠点だったことと無関係ではなかった。タラベラ陶磁器はプエブラを代表とする製品だが、他にガラス工芸、オニックス製品、木工家具、鋳物、煉瓦、織物などの産業が有機的な発展をもたらした。

この町の役割が明確になったのは、コルテス総督の失脚、メキシコ司法行政院の設置を経て1537年に副王制が敷かれ、第一代副王アントニオ・デ・メンドーサが着任してからのことだと思う。首都に近いこの地をメキシコの食糧基地、小麦の生産地にしたのだ。

小さな町に富が集中し人口が集中することで、修道会が信者獲得のため



サンタ・ロサニ僧院・中庭



サンタ・モニカニ僧院・中庭

にこの地が集まって来た。

前述の通り、この地に最初に根を下ろしたのはフランシスコ会の修道院だったが、後にフランシスコ川西に町の中心を移し、ソカロ、大聖堂の周辺にドミニコ会、そしてサンタ・ロサニ僧院、サンタ・モニカニ僧院が根を下ろした。その二つの尼僧院は主にプエブラで女子教育に力を注ぎ、修道会の経営の柱としていた。

植民地時代、この町の人々がどんな生活を営んでいたのかの資料を見つけられなかったので、残念ながらここで詳しくプエブラの歴史を語ることは叶わない。でも、ユネスコの世界遺産に登録されている歴史地区には、躍動するプエブラの歴史を思い描くことができるものがあるのは幸いである。

プエブラ人の遺産

さて、そうしたプエブラの遺産を訪ねてみることにしよう。大聖堂が建設開始したのは1557年だから、都市計画が固まったのはその頃だと思う。

ソカロは正方形ではなく長方形で、古い町がそこにあった訳でもないのにどうしてこうなったのか。さらに疑問なのは、方形の街路は、東西南北からずれていることだ。東西の街路は前回訪ねた Cholula 同様イスタクシウアトル山に向かって西北西になっている。しかも大聖堂の正面もその方向を向いて



プエブラ大聖堂

いる。メキシコのキリスト教信者が主祭壇に向かって祈りを捧げるのはエルサレムのある東と決まっていたのにだ。この西北西の街路の延長線上には前述の山があるのだが、さらにその先に首都メキシコ市がある。もしかしたらそれと関係があるのだろうか。

話を戻そう。大聖堂はメキシコ大聖堂を意識したのか大規模だ。後年増設された教会堂の1.5倍の高さを誇る2基の鐘楼は圧巻なのだが、地震の多いこの地には荷が重すぎるように見える。プエブラで地震があったと聞いたので訪ねてみたのだが、その鐘楼にダメージがあり、修復工事中だった。

プエブラを豊にしたのは首都メキシコに送る農産物だったが、ヨーロッパからの輸入物品を直に目にしたプエブラの職人たちが、良質の品々に刺激されてその技法を身につけていった結果だったと想像する。さてその筆頭はタラベラ陶器で、良質の粘土に恵まれ、メキシコ市へ向かう旧街道沿いに多くの窯が造られている。特にタイルは様々な建物の壁面、内装を飾ることになった。有名なのは「砂糖菓子の家」と呼ばれているアルファニケの館、そして、ロス・ムネコス館。さらにプエブラの教会建築でもその本領を発揮している。



ろうか。修道院を建てるのにすでにソカロ周辺に条件の良い土地が得られなかったためか、このような配置になったのだろう。その教会堂の古びた壁型主祭壇は豪勢で人々を圧倒している。それを見ただけで、この修道会はこの地で多くの信者を集めていたことがわかる。

でもそれだけではない。主祭壇に向かって進むと、



ロサリオ礼拝堂・黄金の天井装飾

その左翼に宝物が隠されている。1690年完成のロサリオ礼拝堂だ。黄金に縁取られたレリーフのドーム天井と壁面、そして手の込んだ螺旋円柱に支えられた聖人像を覆う天蓋。金箔とは言え、そのためにどれだけの黄金を費やしたのか想像もつかない。真珠で富をなしたプエブラ



ロサリオ礼拝堂
ドーム天井と主祭壇を仰ぐ

商人たちによって成し遂げられた作品だという。

ほとんど人のいない信者席に座り、堂内を見回していた。時間とともに円ドームの窓から差し込む光



聖歌隊席・楽器を持つ褐色の天使

が黄金の輝きに変化をもたらし、レリーフが作る陰影と後部聖歌隊席の楽器を手にした褐色の天使が絶妙なハーモニーを奏でていた。

[掲載写真の転載不可] [連載その14完]

[編集部注：掲載写真の細部をご覧になる際にはPC画面で拡大してお楽しみください。]

予告 **メキシコ・日本アミーゴ会**
2025年度 総会・懇親会のお知らせ
 総会・懇親会の対面開催を準備中です。
 詳細確定次第、会員の皆さまにご案内します。
 久方ぶりの再会とメキシコ料理を楽しみに!!
日時: 2025年5月24日(土) 11:00~13:00
会場: CIELITO LINDO@竹芝 (<http://cielito.shop>)
参加費: 5,000円/人
議案: ①2024年度活動報告・決算案
 ②2025年度活動計画・予算案
 ③その他 & 懇親会 (*^o^*)

先のフランシスコ会の教会堂の正面、そして、サンタ・モニカ尼僧院の中庭、サンタ・ロサニ僧院の壁面、そして一面タイルで覆われた台所は圧巻である。その台所は私が食したあのモーレ・ポブラーノの発祥地と言われている。今日この地がタラベラ陶器の世界的な産地を標榜しているのは、陶器博物館を訪ねばうなずける。

さらにこの地に根付いた調度品、建築技術を見逃すことができない。パラフォンシアナ・デル・セミナリオ、ラテンアメリカで3番目に古い図書館だという。その古さにも驚きだが、イス、テーブル、本棚などの調度品も素晴らしい。さらにエスプリト・サント大学の会議室。ドーム天上にあしらわれたアラベスク模様のレリーフと豪華な木製の椅子。大学職員にお願いして特別に見せてもらうことにしたが、開かれた扉の前で圧倒され、思わず息をのんでしまった。



パラフォンシアナ・デル・セミナリオ



エスプリト・サント大学・会議室

プエブラ観光でよく紹介されるのは旧ドミニコ修道会のロサリオ礼拝堂である。本体の教会堂正面はプエブラの街路に会わせて東南東を向いているから、ドミニコ会がこの地に落ち着いたのは経済が活発になり人口増加が見られた16世紀後半ではないだ



ドミニコ会教会・主祭壇

日墨友好415周年親善寄港
メキシコ海軍練習帆船「クアウテモック号」
通訳ボランティアに参加して

メキシコ・日本アミーゴ会 幹事
柳沼孝一郎

メキシコ海軍練習帆船「クアウテモック号」(Buque Escuela Cuauhtémoc, 排水量 1,800 トン、全長 90.5m バウスプリット含む、幅 12m、フォアマスト・メインマスト・ミズンマストの3本マスト、全ての帆を張る(総帆展帆)と総数 23 枚。1982 年スペインのビルバオ造船所にて建造)は、その美しい姿から「海洋の騎士にして使者 (Embajador y Caballero de los Mares)」の名で広く知られています。



船名の Cuauhtémoc は、「ジャガーの軍団」と「鷲の軍団」を擁する軍事国家アステカの言語ナワトル語で「獲物を狙い急降下する雄々しい鷲」を意味します。鷲 (águila) はまた、アステカの太陽トナテウと軍神ウイツィロポチトリの象徴です。そして、国旗のシンボルにもなっているように、ウイツィロポチトリが「サボテンに一羽の鷲が蛇をくわえている土地を求めよ。その地こそアステカが栄えるところである」と告げた鷲でもあります。

守護神でもあるウイツィロポチトリが手にしていたアステカ軍の勝利を永遠に保証するといわれる聖なる武器シウコアトル(火の蛇)をたずさえて、エルナン・コルテスが率いるスペイン軍と勇猛果敢に戦って散った「アステカ王国の最後のトラトアニ(皇帝)」で舳先を飾るクアウテモック号の凛々しいフィギュアヘッド(船首像)は船の守り神です。



船首像：皇帝クアウテモック

練習帆船クアウテモック号の進水から今日までの航行距離は 888,000 海里を超え、これまで 4 回にわたり世界周航を実施してメキシコの国際友好親善に大きく寄与してきました。2009 年に横浜港新港に、2017 年には東京港晴海埠頭に寄港し一般公開されました。2024 年度の公開は 5 回目の世界周航となります。

今般の横須賀寄港は、1609 年 9 月 30 日にヌエバ・エスパーニャ(現在のメキシコ)のマニラ総督ロドリゴ・デ・ビベロー行が乗船するガレオン船「サン・フランシスコ号」が房総半島の御宿・岩和田の海岸に漂着してから 415 年が経過した、いわゆる「日墨友好 415 周年」を記念したものです。日本国民および在日メキシコ人との親善をより深めるべく、約 300 名が乗船し、5 月 6 日にメキシコ・アカプルコ港を出帆、ハワイを経由して、7 月 5 日に御宿町沖合を表敬航行し、7 月 6 日から 9 日まで海上自衛隊横須賀基地逸見岸壁に停泊、一般に公開されたものです。



クアウテモック号のメダル

クアウテモック号はこの後東南アジアからオセアニアの国々を親善寄港して、2024 年 12 月のクリスマスの頃にアカプルコ帰港の予定で、7 月 10 日午前 10 時に横須賀港をあとにしました。

今回の一般公開期間中、計 2,000 人を超える人々がクアウテモック号を訪れましたが、在日メキシコ大使館のスタッフによって来訪者は 10 人 1 組にグループ編成され、各グループに通訳ボランティアがついて、メキシコ海軍の若き士官の懇切丁寧な説明に興味深く聞き入りながら、約 90 分の帆船見学ツアーを満喫していました。(了)



通訳する筆者



甲板の来訪者

あとがき：今年の弥生&卯月は春爛漫前に花冷えと菜種梅雨が同居し、地域によっては青空と白雪と桜花と春雨のもとでの花見が賑やかです。人間世界では某大国が保護関税措置を導入し、營々と編み上げてきた自由貿易体制の根幹を揺るがしています。価値観の差を横目に新しい世界経済秩序を再構築するシン思考による“変身”が不可欠でしょう。本号では柳沼会員がメキシコ大地の人々への眼差しの、阿部会員が大地の歴史を紡ぐ人々への共感の、大切さを寄稿していただきました。そうだ!!覇権を競わず投稿を競おう!!5月24日の総会・懇親会へのご参集を期待。[20250403 か]